

親神はこの世界と人間を創造した神であり、「この世界を創めて以来これまでになかった『つとめ』を始め出し、その『つとめ』に創造の働きを今一度現して、この世界を確かに治める」(六号8)と原初の創造の働きを再びこの世界に現すことを述べて、この世界に親神の望まれる世界を再び「創る」楽しみを述べている。

「おふでさき」ではこのような「創る」というモチーフはしばしば建築(普請)の喩えで表現されており、具体的には「つとめ」に参画する人々を集めて育てるプロセスと重ねられている。つまり、そのような人々は「用木」(=建築に必要な材木)と表現されて、「陽気ぐらし」を目的とする親神の用事に役に立つ者を意味し、先述したように親神が望まれる世界の最も中心になる人は「建築における大黒柱」という意味で「真柱」と表現されている。

このようなモチーフで第三号の四十九首は「だんだんと多く寄せているこの立木、用木になるものはない」と述べて、続けて「どんな木も多く寄せてはいるけれど、歪んだり屈んだりしていても間に合わない」(三号50)、「世界中の胸の内を掃除して『真柱』を定める、そのときをはやく実現したい」(三号51)と詠われている。つまり、世界の創造・建築のためにいろんな種類の木を集めたが、歪んでいたたり曲がっていたりして、「用木」としてなかなか使えそうにないと述べている。

さて、上田嘉成氏は、どのような人間が「用木」として神の用事に役立つのかを実際の材木の性質を参考にして推測している(『みちのとも』立教173年6月号)。彼が目にしたのは応曲強度・応張強度・応圧強度・応剪強度という4つの基準から測られる木の堅さである。応曲強度とは曲げようとする力に対する材木の堅さであり、一平方センチに対して何グラムの力に耐えるかという強さを表している。先述の第五十首の「歪み」「屈み」とは木が曲がっていることを意味し、そのような木は用に使えないと述べられている。

上田氏は、そのような木の性質を用木として期待されている人の心のあり様に反映させて、「歪み」とは「なんでも物事にひっかかって人が困るほど威張る態度」を表し、「屈み」とは「皆が集まっても自分みたいなものは数のうちに入っていないからまあやめておこう」と思うような「引っ込み思案・すねたような態度」を表していると捉える。

次に、応張強度とは材木が両端から引っ張られたときに耐えられる力を示しており、上田氏によれば、それは人間の生活においては責任ある用事が二つ三つと重なる場合にその人の心が折れずに耐えられる堅さを表している。また、応圧強度とは材木がどれだけ重い荷物をのせられるかという圧迫に耐える強さを示しており、人間の生活では与えられる用事の重さに耐えられる心の堅さを示している。このように神の用事を担う「用木」はそれぞれ応曲強度・応張強度・応圧強度に表されるような心持ちの強さ・堅さを求められていると説明される。

そして、上田氏が最も注目するのが4番目の応剪強度である。それは、材木に鋸をかけたり、蚤をつかって細工するとき耐えられる力であり、応曲強度・応張強度・応圧強度とは違って、

建築の材木としてはその強度が低いほうが、大工仕事がしやすくなるという点で価値が高い。つまり、曲げる力に強く、引っ張る力に強く、圧する力に強いが、細工されるときには堅すぎない木が材木として最も重宝され、そのような条件を満たしている木に檜がある。檜や桜といった木は応曲強度・応張強度・応圧強度が強いが、応剪強度も強く、細工がしにくい。このことから上田氏は、神の用事を担う「用木」としての人間も、曲げても曲がらない、引っ張ってもちぎれない、荷物がかかっても砕けない強さをもつ反面、神が望む役柄に柔軟に応じることができるよう神にとって「使いやすい」柔らかさを兼ね備えることが重要であると結論づけている。

このような「使いやすい用木」とはその胸の内に「ほこり」がなく心が澄んだ者であり、第三号は続けて「世界中胸の内の掃除を、親神が帚となってするから、現れてくる働きや事柄をしっかりと見ていよ」(三号52)、「これからは神が表に現れて、山の方へも掃除をしにいく」(三号53)、「世界中を神が掃除をするならば、心が勇んで、陽気づくめになる」(三号54)、「何もかも神が引き受けるから、どんなことでも自由自在に(守護を現す)」(三号55)と述べている。

そして、再び「真柱」を入れる(定める)話題に戻り、「この度は内を治める真柱を早く入れたいから(心の)水を澄ますように」(三号56)、「高山の中心は親神の思いを知らない、それが何よりもどかしい」(三号57)、「上にいる人々はだんだんと世の中を我が物に振舞っている。神の残念をどのように思っているのか」(三号58)と、「上に立つ人々」が親神の思いを分らないのを残念に思う一方、「内を治める真柱」という表現にあるように、そのような「高山」の事態を梶本眞之亮が中山家に入り「真柱」という立場に定まることと結びつけて述べている。つまり、ここでは「世界」の事情と「内」の事情が相互に関係していることが読み取れる。

続いて、「今までは何を言っても実際には見えてこなかったが、もうこの度は時機がきた」(三号59)、「これからは陽気づとめをまた急ぎ込むが、それがどういう訳かは俄かには分からないだろう」(三号60)、「今までも何もかも説いてきているが、(聞いている方が)それを一体何のことだろうと思っている」(三号61)、「これまではどのような話を説いていても、時機が来なかったので目の当たりにはしていない」(三号62)、「これからはもう時機が来ているから親神の言うことがそのまま見えてくる」(三号63)と親神の言葉を半信半疑で聞く人々の態度をもどかしく思い、その言葉を具現化する時に来ていることを述べている。

そして、立教後36年のある月の25日に「屋敷」に掃除しに来た者たちを示唆して、「しっかり聞いてくれ、三六二五の暮れ頃に胸の掃除を神がする」(三号64)と詠い、さらに「思案せよ、どれほど澄んでいる水であっても泥を入れたら濁ってしまう」(三号65)、「濁り水をはやく澄まさないことには、『しんのはしら』の入れようがない」(三号66)、「はしらさえ早く入れたことならば、末代までも治まっていく」(三号67)と「しんのはしら」を定めたい思いを繰り返し述べている。